

# 認知症の妻・母へスキンケアをする男性の特性

福岡大学医学部看護学科

西尾 美登里

This study aim to confirm the characteristics of male caregivers who provide skin care a mother or wife with dementia living at home. Participants were 90 male caregivers of a female family member with dementia who living at home. The study period was from May 2017 to January 2018. We investigated the actual state of skin care and, nursing care burden. We assessed care burden using the question “Do you have a physical, emotion, social, or financial care problem?” and the Zarit Caregiver Burden Scale-8. Participants self-esteem was assessed using the Rosenberg Self Esteem Scale and the question “Do you have fun in your life?”

Caregivers who were the husband of the care recipient tended to be older. Those who were sons of the care recipient tended to be long-team caregivers, their care recipient (mother) tended to be older. Care recipients who were wives received more skin care.

Male caregivers that provide skin care had higher self-esteem than those that did not.

We found that male caregivers who were husbands wanted their wife to look beautiful or healthy. The key characteristic of male caregivers is treat oneself and mother or wife dementia.

## 1. 緒 言

わが国では、人口構成の変化や社会的要因の変化に伴い、家族の介護役割を担う続柄は大きく変化している<sup>1)</sup>。家族の主介護者は、従来女性の役割とされてきたが、男性の主介護者の割合は、1999年では18.6%から2016年では34.0%と<sup>2)</sup>、約15年で50%程度増加している。男性の家族介護者は、介護者役割の継続において、慣れない介護への問題を抱えているが<sup>3, 4)</sup>、男らしさに固執するため、弱音を吐かないことが報告されている<sup>5)</sup>。

介護が原因での殺人事件の量的研究によると<sup>6)</sup>、殺人事件の原因の第3位に介護が挙げられる。続柄で最も多いのは夫が妻を殺害する事件であった。また、加害者は72.3%が男性であり、被害者の74.3%が女性であった。これらの数値からも、特に家族を男性が介護することは、困難を抱えていると言わざるを得ない。

在宅介護を継続するためには、男性介護者自身の身体的・精神的・社会的健康が必須であり、男性介護者の支援においては、医療だけで対応できるものではなく、男らしさの過剰な意識からの解放が、男性の健康に繋がると言われている<sup>7)</sup>。

自宅で女性の家族を介護する男性たちからは、スキンケアの方法や化粧品の使用方法について困惑している声が多

く聞かれた。老年期の皮膚は、皮下脂肪が薄く、皮膚が脆弱である<sup>8)</sup>ため、適切なスキンケアや化粧をすることによりQOLが向上する<sup>9)</sup>。家族会や男性介護者の会などの集いにおいて、化粧をした妻に対し、男性介護者が手をさすり、頬をなで話しかけるなど愛情深く接している姿を目にすると、母や妻への化粧は、母や妻を健康的で若々しい状態に保ち、介護継続への意欲に繋がる効果があることが予想される。しかし日本においては、男性介護者のスキンケアの実態や、介護者としての役割受容との関係は明らかにされておらず、研究も見当たらない。

したがって当研究により、妻や母にスキンケアを実施する男性の実態と特性を明らかにし、母や妻にとってスキンケアの効果を検証する。

## 2. 方 法

### 2. 1. 研究対象者

在宅で認知症の妻または母を介護する男性90名。

### 2. 2. 調査方法

自記式質問紙調査。

### 2. 3. 調査項目

#### 2. 3. 1. 対象者の基本属性：

介護者との続柄、年齢、就労の有無、経済状況、介護期間、自尊感情 要介護者へ実施するスキンケアの有無と所要時間と頻度、介護において身体的・精神的・社会的・経済的困難感、楽しみの有無。

#### 2. 3. 2. 対象者が介護している要介護者の基本属性：

年齢、診断名、介護保険制度における介護度。



Characteristics of male caregivers, who provide skin care to a mother or wife with dementia

Midori Nishio

Faculty of Medicine School of Nursing,  
Fukuoka University

### 2.3.3. 使用尺度

介護者の介護負担感：Zarit介護負担尺度日本語版にて測定した（Zarit Caregiver Burden Interview：以下J-ZBI<sub>8</sub>）。荒井らによって日本語版に翻訳された22項目のJ-ZBI<sub>10</sub>）を8項目<sup>10,11)</sup>の短縮版として開発された。介護をストレスターとしたときの負担感を測定するものである。介護そのものによって生じる項目と介護を始めたために生じる負担、全体的な介護負担感を問うものである。回答は、「思わない」「たまたま思う」「時々思う」「よく思う」「いつも思う」の5件法で、32点満点である。

自尊感情<sup>12,13)</sup>：ローゼンバーグの自尊感情尺度日本語版（Rosenberg Self Esteem Scale：以下（RSES-J））にて測定した。当尺度は10項目で構成されている。国外において最も多く用いられている尺度である。国内において2007年に日本語版において信頼性・妥当性が検証されている。回答は「全くあてはまらない」「あてはまらない」「あてはまる」「非常にあてはまる」の4件法で40点満点ある。

### 2.3.4. 分析方法

項目ごとに基本統計量を求め平均値と標準偏差を用いた。妻と母の連続係数の群の差は $t$ 検定、加えてスキンケアの有無において $X^2$ とマンホイットニーの $U$ 検定を用いた。解析にはSPSS 23.0J for Windowsを用い有意水準は5%とした。

### 2.3.5. 倫理的配慮

福岡大学医の倫理審査委員会の承認を得て行われた（承認番号 2017M040）。対象者には、研究協力を依頼する際は、研究の趣旨、協力の任意性、被験者にならなくても不利益がないこと、守秘義務、学術誌などで発表することなどを調査の依頼文に明記した。調査票の返送をもって調査への同意とみなした。

## 3. 結 果

### 3.1. 在宅で認知症の人を介護する男性の概要

要介護者との続柄は、妻は55名(61%)、母は35名(39%)で妻を介護する男性が多かった。平均年齢は、妻を介護する男性は75歳(SD 6.6)、母を介護する男性は66歳(SD 9.4)であり、全体は72歳(SD 8.9)であった。有意に妻を介護する男性が高齢であった。仕事を有する男性数と経済状況において、妻介護男性群と母介護男性群の差はなかった。介護における身体的困難感がある男性は55名(60.4%)、精神的困難感がある男性は69名(75.8%)、社会的困難感がある男性は35名(38.5%)、経済的困難感がある男性は29人(31.9%)であった。楽しみを有している男性は74人(81.3%)であった。介護負担感の平均得点は、差はなかった。介護期間と1日の介護平均時間は、有意に妻を介護する男性が長かった。

情緒的支援平均数において、妻と母の属性や家庭内外と

の差はなかった。自尊感情平均総得点はスキンケア実施群が有意に高かった(表1)。

### 3.2. 在宅で生活する認知症の女性の概要

被介護者の平均年齢は、妻は73歳(SD 6.6)、母は89歳(SD 6.2)で有意に母が高齢であった。被介護者の認知症の診断名は、妻はアルツハイマーが最も多く、次いでレビー、前頭側頭型の順であった。母はアルツハイマーが最も多く、次いでレビー、脳血管型の順であった。介護保険における要介護度は、妻は最も要介護3が多く、次いで要介護5であった。母は最も要介護4と5が多かった(表2)。

### 3.3. 妻と母へのスキンケアの有無と頻度

スキンケアを実施している男性は45名(49.5%)で、妻介護群は34名(62%)、母介護群は11名(32%)と有意に妻がスキンケアを受けていた。スキンケア実施の頻度は、妻介護群は「毎日」が最も多く53%、次いで「外出時のみ」が29%、「週に数回」が18%であった。母介護群は「外出時のみ」が最も多く46%、次いで「毎日」が36%、「週に数回」が9%などであり、妻は母よりもスキンケアを受ける頻度が高かった(表3)。

### 3.4. スキンケアを実施する男性の特性

スキンケア実施群は未実施群よりも困難感が低かった。介護における負担感では、群間差が見られなかった。自尊感情はスキンケア実施群が有意に高く、楽しみはスキンケア未実施群が有意に有していた(表4)。

## 4. 考 察

### 4.1. 在宅で認知症の異性を介護する男性の属性

要介護者の続柄と各年齢や介護期間から、後期高齢者の息子が母親を7年以上介護していることを示し、後期高齢者の夫が年下の妻を4年以上介護していることを示している。息子介護者に着眼すると、50代後半で家族介護者という家庭内での役割を担ったこととなる。現在の日本における定年の平均は、60歳が79.3%、65歳が16.4%であることから<sup>14)</sup>、息子介護者は、社会的役割を担ったまま母の介護が始まった可能性が高い。今後の定年となる年齢は、60歳定年が79.3%と前年度80.7%から減少し、65歳定年が16.4%と前年度より1.2%増加、加えて66歳以上定年導入の企業は1.4%と前年度より0.4%増加していることから、長く社会で勤務できる体制が創られることが予想される。社会的な役割を担う年齢が高齢化するとすれば、年齢が高くなるほど介護リスクが高まり、介護と仕事の問題に直面する人数も増加することを示唆する。2012年度の就労状況基本調査では<sup>15)</sup>、介護や看護を理由に離職や転職をした介護者が増加している。つまり、介護により退

表 1 在宅で認知症の人を介護する男性の概要

| 項 目             |              |          | n    | 結果 (%)  |
|-----------------|--------------|----------|------|---------|
|                 | 続柄 (人)       | 妻<br>母   | 55   | (61.0)  |
|                 |              |          | 35   | (39.0)  |
| 年 齢 (歳)         | 妻<br>母<br>総計 |          | 75   | SD 6.6  |
|                 |              |          | 66   | SD 9.4  |
|                 |              |          | 72   | SD 8.9  |
| 職の有無            | 妻            | 有職       | 21   | (38.1)  |
|                 |              | 無職       | 34   | (39.0)  |
|                 | 母            | 有職       | 15   | (42.8)  |
|                 |              | 無職       | 20   | (39.0)  |
| 困難感             |              | 身体的      | 55   | (60.4)  |
|                 |              | 精神的      | 69   | (75.8)  |
|                 |              | 経済的      | 35   | (38.5)  |
|                 |              | 社会的      | 29   | (31.9)  |
| 私は楽しみを有している (人) |              |          | 76   | (83.5)  |
| 一日の介護時間 (時間)    | 妻<br>母       |          | 4.0  | SD 1.2  |
|                 |              |          | 3.4  | SD 1.4  |
| 平均介護負担感*        | 妻<br>母       |          | 10.5 | SD 5.1  |
|                 |              |          | 12.8 | SD 1.2  |
| 情的支援者数          | 妻            | 家族内      | 3.73 | (2.4)   |
|                 |              | 家族外      | 3.27 | (2.2)   |
|                 | 母            | 家族内      | 4.00 | (2.3)   |
|                 |              | 家族外      | 3.70 | (2.1)   |
| 経済状態 (人)        | 妻            | 十分に生活できる | 26   | (47.3)  |
|                 |              | 生活には支障ない | 25   | (45.6)  |
|                 |              | 支障あり     | 4    | ( 7.2)  |
|                 | 母            | 十分に生活できる | 16   | (45.7)  |
|                 |              | 生活には支障ない | 18   | (51.4)  |
|                 |              | 支障あり     | 1    | ( 2.9)  |
| 平均介護期間(月)       | 妻<br>母       |          | 48   | SD 42.6 |
|                 |              |          | 89   | SD 6.2  |
| 平均自尊感情(点)       | 妻<br>母       |          | 23.8 | SD 4.6  |
|                 |              |          | 24.9 | SD 1.8  |

\* Japanese version of the Zarit Caregiver Burden Scales Student's-t-test      \*p < 0.05      SD : 標準偏差

表2 在宅で生活する認知症の女性の概要

| 項目       |   | 結果 (%)   |           |
|----------|---|----------|-----------|
| 平均年齢 (歳) | 妻 | 73       | SD 6.6    |
|          | 母 | 89       | SD 6.2    |
| 認知症の診断名  | 妻 | アルツハイマー型 | 28 (50.9) |
|          |   | レビー小体型   | 18 (32.7) |
|          |   | 前頭側頭型    | 6 (10.9)  |
|          |   | 脳血管型     | 3 (5.5)   |
|          | 母 | アルツハイマー型 | 19 (54.3) |
|          |   | レビー小体型   | 10 (28.6) |
|          |   | 前頭側頭型    | 1 (2.8)   |
|          |   | 脳血管型     | 5 (14.3)  |
|          | 妻 | 要支援      | 3 (5.5)   |
|          |   | 要介護1     | 6 (10.9)  |
|          |   | 要介護2     | 5 (9.1)   |
|          |   | 要介護3     | 13 (23.6) |
|          |   | 要介護4     | 8 (14.5)  |
|          |   | 要介護5     | 16 (29.1) |
|          |   | 申請なし     | 4 (7.3)   |
|          | 母 | 要支援      | 3 (8.5)   |
|          |   | 要介護1     | 0 0.0     |
|          |   | 要介護2     | 4 (11.4)  |
|          |   | 要介護3     | 7 (20.0)  |
|          |   | 要介護4     | 8 (22.9)  |
|          |   | 要介護5     | 8 (22.9)  |
|          |   | 申請なし     | 5 (14.3)  |

**Note.** Care support is a less intensive level of support required than care need.  
The numbers refer to increasing levels of care required.  
Students-test \*p<0.05

表3 スキンケアの有無と頻度

| 項目           |   | n        | 結果 (%) |
|--------------|---|----------|--------|
| 続柄           |   |          |        |
| スキンケアを受けている人 | 妻 | 34       | (62.0) |
|              | 母 | 11       | (32.0) |
| 順位           |   |          |        |
| スキンケアの頻度     | 妻 | 1 毎日     | (53.0) |
|              |   | 3 週に2.3回 | (10.9) |
|              |   | 2 外出時のみ  | (18.0) |
|              | 母 | 2 毎日     | (36.0) |
|              |   | 3 週に2.3回 | (9.0)  |
|              |   | 1 外出時のみ  | (46.0) |

Mann-Whitney U test \*\* : P<0.01

表 4 スキンケアを実施する男性の特性

| 項目               | スキンケアをしていますか? |               |           | X <sup>2</sup> |
|------------------|---------------|---------------|-----------|----------------|
|                  | はいn=36        | いいえn=48       | (%)       |                |
| 身体的困難感がありますか (人) | はい 24 (66.7)  | いいえ 12 (33.3) | 33 (68.8) | p<0.001        |
| 精神的困難感がありますか (人) | はい 27 (75.0)  | いいえ 9 (25.0)  | 44 (91.7) | p<0.001        |
| 社会的困難感がありますか (人) | はい 16 (44.4)  | いいえ 20 (55.6) | 20 (41.7) | p<0.001        |
| 経済的困難感がありますか (人) | はい 13 (36.1)  | いいえ 23 (63.9) | 17 (35.4) | p<0.001        |
| 楽しみを有していますか (人)  | はい 35 (97.3)  | いいえ 1 (6.7)   | 41 (85.4) | p<0.001        |
|                  | (SD)          |               |           | Z値             |
| 介護負担感平均得点 (点)    | 38.99 (8.7)   | 45.14 (7.4)   | -1.145    | n. s.          |
| 自尊感情平均得点 (点)     | 50.63 (11.1)  | 35.39 (12.6)  | -2.894    | *              |

X<sup>2</sup>: individual variable of comparison between skin care and not.

J-ZBI: Japanese version of the Zarit Caregiver Burden Scale -8

RSES-J: Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale.

\*: p<0.05

n. s.: not significant

職せざるを得ない息子介護者が今後増加する可能性がある。母親を介護する息子の年齢は40歳～60歳で有職者である現状<sup>16)</sup>から、特に母を介護しながら仕事を有する息子介護者に着眼し、介護役割を担う中で問題を抱えていないか、周囲は注意深く観察する必要がある。現在、介護が原因の虐待の加害者は男性が7割で、続柄の4割以上が息子介護者である<sup>6)</sup>。離職すると貧困となるリスクは否めず、貧困は医療とのつながりが希薄となり生活破綻や社会的孤立の原因となる可能性がある<sup>17)</sup>。従って男性介護者の中でも特に息子介護者へ焦点をあて、仕事と介護を継続するための支援が必要と考える。

## 4.2. 母と妻が受けるスキンケアの効果

お世話をする家族が男性の場合、続柄において、母よりも妻のほうがスキンケアを受けている実態が明らかになった。スキンケアの一部である化粧の効果は、見た目や本人の気持ちを若くし、見た目の若さは内臓機能とは有意な相関を示すことから、スキンケアは健康であることにも影響を与えているとされる<sup>18)</sup>。これらから、介護している男性への心理的効果は、妻は母よりも、認知症の家族である異性へ美しく若々しくいてほしいという気持ちを、スキンケアにより投影されていると考えられる。また、社会的

コミュニケーションを、スキンケアの中の化粧は円滑にすることや<sup>19, 20)</sup>、社会的な治療効果を期待されることから<sup>9)</sup>、認知症の妻は母よりも、日常の中で、外部ともコミュニケーションを図られている可能性があると考ええる。

## 4.3. スキンケアを通して見る男性の特性

化粧の身体的効果は、化粧前よりも脳波のパターンが有意に安定化し、不安定となったニューロン活動を安定化させる効果があり<sup>21)</sup>、皮膚からの感覚刺激は、記憶や人間特有の高次機能を活性化させる効果により神経活動が安定することから<sup>22)</sup>、認知症者特有の不安定な神経活動による行動を軽減する可能性がある。不安定な神経活動による問題行動によって、つい手を挙げてしまいたくなる被介護者について、[高崎]らは、ストレス反応を軽減する目的で対処して、現実の問題解決せずストレス反応と悪循環すると述べ<sup>23)</sup>、スキンケアは認知症者の問題行動の抑止力となり、男性の介護者への問題解決となる可能性がある。

スキンケア実施群と未実施群において、身体的介護困難感、精神的介護困難感、社会的介護困難感、経済的介護困難感の差があるにも関わらず、介護負担感においては差がみられない。説明がつかないようにも思えるが、Pearinのストレスモデルで考えると、介護負担感には介護ストレスが



一を測定するものであり、心身の健康や社会や経済の困難の有無は、介護役割を継続する資源を測定する項目とも考えられる。従ってスキンケアを実施する男性はしない男性よりも、介護を担う資源に恵まれている可能性がある。また、スキンケア群は有意に自尊感情が高かった。自身の自尊感情が高いことは、内的な強さを持ち、内面的強さは、優しさや生き方を認知するという結果<sup>13)</sup>から、認知症である異性へ思いやりを持ち介護生活を継続していると考えられる。

## 5. 総 括

認知症の妻は母よりも有意にスキンケアを受けていることが明らかとなった。認知症の妻は母よりも家庭内外でコミュニケーションが図られ、スキンケアを実践する夫は愛情深く認知症の妻を介護している可能性がある。一方で、認知症の母を介護する息子介護者は、介護と仕事の両立で悩み、仕事の継続に困難を抱えている可能性がある。

当研究において、介護に問題を抱えていないかなどを見極める指標の一つに、スキンケアがあると考える。スキンケアは認知症者の問題行動の抑止力となり、男性の介護者への問題解決の一助となる可能性がある。

## 6. 当研究の限界

今後は、仕事の有無や年齢の違い、介護の経験などの異なる対象についても調査、比較検討することが必要であると考えられる。更に対象者を増やし、介護による虐待防止と共に介護離職防止に向けた取り組みが必要であると考えられる。

## 謝 辞

当研究は、コスメトロジー研究振興財団による研究助成により実施された。当研究にご協力いただいた家族会やクリニックの皆様、男性介護者の皆様へ心からお礼申し上げます。

## (引用文献)

- 1) 津止正敏：家族介護支援のリアリティ ―男性介護者研究から提言―，高齢者虐待防止研究，5：32-38. 2008.
- 2) 厚生労働省統計情報・白書(2013)「国民生活基礎調査」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/05.pdf>, 2018. 7.4).
- 3) 金子克子，彦聖美，鈴木祐恵：在宅医療助成報告「男性介護者を地域で支える方略に関する調査研究」，公益財団法人勇美記念財団，東京，2010.
- 4) 永井邦芳，堀容子，星野順子ほか：男性家族介護者の心身の主観的健康特性，日本公衆衛誌，58(8)：606-615. 2011.
- 5) 奥田祥子：男性漂流 第1版，第講談社+α，東京. 2015.
- 6) 湯原悦子：介護殺人から見出せる介護者支援の必要性，日本社会福祉大学社会福祉論集，134：9-30. 2016.
- 7) 彦聖美 大木秀一：男性介護者の健康に関連する社会的決定要因と支援の方向性，石川看護雑誌，13：1-10. 2016.
- 8) 根来佐由美，葉山有香，井上智子：地域女性高齢者の皮膚の乾燥状況と乾燥に関連する生活習慣の実態，日本健康医学雑誌，21(4)：237-243. 2013.
- 9) カルデナス暁東，西尾ゆかり，福井奈央ほか：わが国の医療現場におけるメイクセラピーの応用に関する文献検討，大阪医科大学看護研究雑誌，3：69-77. 2013.
- 10) Arai Y, Kudo K, Hosokawa T, et al: Reliability and validity of the Japanese version of the Zarit Caregiver Burden Interview. Psychiatry and Clinical Neuroscience, 51：216-226. 1997.
- 11) 荒井 由美子，田宮 菜奈子，矢野 栄二：Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版(J-ZBI\_8)の作成 その信頼性と妥当性に関する検討，日本老年医学会雑誌，40(5)：497-503. 2003.
- 12) Coopersmih S: The antecedents of self-esteem, W. H Freeman, 1967.
- 13) 遠藤辰雄，井上祥治，蘭千壽：セルフエスティームの心理学 第8版，ナカニシヤ出版，京都. 2007.
- 14) 厚生労働省(2017)「就労条件総合調査」(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/jikan/syurou/17/index.html>, 2018. 7.3).
- 15) 総務省統計局(2012)「就労状況基本調査」(<http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2012.2018.7.7>).
- 16) 彦聖美，鈴木祐恵，金川克子ほか：高齢期の妻や親を介護する男性の介護状況に関する実態調査，石川看護雑誌，10：37-46. 2013.
- 17) 藤田孝典：下流老人 第13版，朝日新書，(東京) 2015.
- 18) 小原克彦：中・高年の見た目年齢の解析，コスメトロジー研究報告，24：59-171. 2016.
- 19) 茂木健一郎：化粧する脳 第1版，集英社，東京. 2009.
- 20) 大坊郁夫，高木修：化粧行動の心理学 化粧する人間のこころと行動，北大路書店，京都. 2009.
- 21) 町田 明子，白土 真紀，高田 定樹ほか：脳波を用いた高齢者に対する化粧療法の効果検証，老年精神医学雑誌，23(8)：978-987. 2012.
- 22) 町田明子：脳波を中心とした生理学的指標による化粧療法の効果検証，東京工業大学，平成25年度学位論文，東京. 2013.
- 23) 高崎絹子：実践から学ぶ高齢者虐待の対応と予防 第1版，日本看護協会出版会，東京. 2010.